



KIDS  
DESIGN  
AWARD

# インクルーシブ教育の実践 ～変わりつつある教育現場からのメッセージ～

ダイバーシティを語るとき、「どんな成果があるのか？」という問いがつきものです。とくに企業においては、「人材の多様化が業績アップにどう関係するのか？」と、成果直結で議論されることも多いと思います。また、東京2020オリンピック・パラリンピックの開催が追い風となり、ダイバーシティへの関心が高まるなか、多くの企業で「ダイバーシティ推進」への機運が高まりをみせていますが、ダイバーシティの本当の意味を理解しないままでは、東京2020に向けた一過性のもので終わってしまいます。

今回は、「ダイバーシティとは何か？」を考えるキッカケとして、教育現場で実践されているインクルーシブ教育の事例を『みんなの学校』の上映を通して紹介します。今、日本の教育現場は企業以上にダイバーシティに富んでいます。日本で暮らす外国人の増加にともない、保育園や幼稚園、小学校に通う外国人のこどもは年々増えています。また、この20年あまりで発達障害児は7倍に増えているため、現場では待ったなしの試行錯誤が続いているからです。

現在、各企業で取り扱っている商品のターゲットを設定するとき、マジョリティ（多数派）に限定するような排他的な考え方が一般的ですが、高齢者、障害者、外国人など、従来ユーザー設定から除外されてきたマイノリティな人々を含めたすべてのターゲットを対象とする包括的な考え方を検討するキッカケにもなればとも考えています。

教育現場での取り組みから「ダイバーシティとは何か？」「インクルージョンはなぜ必要か？」といった気づきを得ることが、真のダイバーシティの理解につながれば、と考えています。教育現場の今を知ることで、人として企業人として、明日から実践できるヒントを見つけてください。

日時：11月15日（金）14：00～

場所：株式会社ADKマーケティング・ソリューションズ13階シアタールーム  
（東京都港区虎ノ門1-23-1 虎ノ門ヒルズ森タワー）

定員：30名

スケジュール： 13:50 受付  
14:00 開催挨拶  
14:10～上映会開始  
15:50 休憩  
16:00～グループディスカッション  
17:00 終了



- 申込方法：下記必要事項を記載の上、info@kidsdesign.jp（担当：長野）までメールをお送りください。
  - 必要事項：氏名・会社名・ご所属・メールアドレス・当日連絡の付く電話番号
  - 申込締切11月8日（金）18：00
- ※お申込多数の場合、1社当たりの人数を制限させていただく場合があります。ご了承ください。

特定非営利活動法人

キッズデザイン協議会

問い合わせ：03-5405-2141（平日9：00～16：00） 担当：長野



(C)関西テレビ放送





# すべての子供に居場所がある学校を作りたい。

大空小学校がめざすのは、「不登校ゼロ」。ここでは、特別支援教育の対象となる子も、自分の気持ちをうまくコントロールできない子も、みんな同じ教室で学びます。ふつうの公立小学校ですが、開校から6年間、児童と教職員だけでなく、保護者や地域の人のもいっしょになって、誰もが通い続けることができる学校を作りあげてきました。

すぐに教室を飛び出してしまう子も、つい友達に暴力をふるってしまう子も、みんなで見守ります。あるとき、「あの子が行くなら大空には行きたくない」と噂される子が入学しました。「じゃあ、そんな子はどこへ行くの？ そんな子が安心して来られるのが地域の学校のはず」と木村泰子校長。やがて彼は、この学び舎で居場所を見つけ、春には卒業式を迎えます。いまでは、他の学校へ通えなくなった子が次々と大空小学校に転校してくるようになりました。



## 学校が変われば、地域が変わる。 そして、社会が変わっていく。

このとりくみは、支援が必要な児童のためだけのものではありません。経験の浅い先生をベテランの先生たちが見守る。子供たちのどんな状態も、それぞれの個性だと捉える。そのことが、周りの子供たちはもちろん、地域にとっても「自分とは違う隣人」が抱える問題を一人ひとり思いやる力を培っています。

映画は、日々生まれかわるように育っていく子供たちの奇跡の瞬間、ともに歩む教職員や保護者たちの苦悩、戸惑い、よろこび……。そのすべてを絶妙な近さから、ありのままに映していきます。そもそも学びとは何でしょう？ そして、あるべき公教育の姿とは？ 大空小学校には、そのヒントが溢れています。みなさんも、映画館で「学校参観」してみませんか。



驚いた！ ここには、ありのままの公立小学校の魅力が、大胆に惜し気もなく躍動している。人間が発達可能体であることを、限界なしに教えてくれる。それにしてもスゴイ記録映画が完成したものである。学校と教育の未来に、希望が湧く映画である。

——尾木直樹（尾木ママ）教育評論家／法政大学教授

一緒に学ぶという選択肢を考えられなかった人たちに、こんな方法もあるんだということを知ってほしいと思いました。

——20代・女性（大学院生）

平成25年度（第68回）  
文化庁芸術祭大賞 受賞理由

他の地域では厄介者扱いされていた転校生が、教師と同級生、そして地域が包み込むことで、素直で心優しい子供に成長していく姿は、見ている者の心を熱くする。大空小学校の試みは、上からの教育改革とは一線を画す、現場からの教育改革でもある。

子供たちひとりひとりが能力に応じて大切にされていること、手がかかる子もかからない子もいるけど平等に愛されていること、そういう学校が地域の中で理解されて存在していること、それらのことにとっても感動しました。

——細川貂々（漫画家・イラストレーター）

minna-movie.com